

ICF(国際生活機能分類)の誤用例

1. ICFモデルについての誤解からくる誤用

ICFが「統合モデル」であることへの理解が不十分なため、種々の誤解・誤用が生じている。

- 1) ICFは「社会モデル」だという誤解:ICFにより環境因子から生活機能への影響を見ることが可能であることから、ICFは「社会モデル」だと誤解されることが多い。ICFは、環境因子と個人因子からなる背景因子、心身機能・身体構造と活動と参加からなる生活機能、そして健康状態といった要素間の相互作用を重視する「統合モデル」である。
- 2) ICFは「医学モデル」と「社会モデル」との「折衷」だという誤解:ICFは「医学モデル」や「社会モデル」の「統合モデル」であり、これら両モデルよりも高次の概念レベルでの総合化であることから、多様な内容と新たな特長(特にプラス面と相互作用の重視)を有している。単に2つのモデルを折衷して作られたものではない。
- 3) マイナス面の評価を中心に使用するという誤り:ICFモデルは、プラス面と相互作用を重視したものであるが、実際の使用に際してマイナス面を中心に捉え、加えて背景因子(環境因子、個人因子)の影響の考慮を省き、健康状態のみにより生活機能低下が引き起こされたと評価するというような使用が行われる場合がある。

2. 「活動」と「参加」の概念的区別の不徹底又は混同(同一視)

ICFの定義においては、「活動」と「参加」が明確に区別されている。ICIDH(国際障害分類)からICFへの改定過程では、最終段階まで「活動」と「参加」の分類は別に取り扱われていたが、最終的には、現行の「共通リスト」となった。そのため、現在、分類表は単一リストで示され、仮に「d」で始まるコード名とされているが、これは厳密に用いる場合には、「活動」と「参加」の概念を示すものであり、「活動」を示すために用いる時は「a」で、「参加」を示すためには「p」を選択する必要があるということを理解した上で、使用することが大切である。しかし、こうした経緯を踏まえずに誤用される場合がある。

- 1) 「活動」、「参加」を区別しない(混同)ことによる誤用:違ったレベルに属するこれら「活動」及び「参加」の区別を意識することなく、一律にリストに記載されている「d」をのみを用いる誤用。
- 2) 「活動」、「参加」の違いを適切に理解できていないことによる誤用:「活動」を示す「a」又は、「参加」を示す「p」を使用するものであるが、その定義・理解が正確に理解していないことよって、区別があいまいなまま利用している誤用。
- 3) 「活動」と「参加」が一对一の対応がされているとの誤解による誤用:ひとつの「参加」項目にはその具体像である複数の「活動」項目が対応すると考えられる。しかし、「活動」と「参

加]が一対一に対応すると誤解される場合があり、十分な活用が図れていない可能性がある(「一対一なのだから区別する必要はない」という誤認につながる)。

3. 「活動」の「実行状況」と「能力」との区別があいまいであることによる誤用

これはICFの活動の評価に大きな影響を及ぼす重要な区別であるが、この区別を十分理解しないために次のような誤用が生じる恐れがある。

- 1) 両者を全く区別しないことによる誤用: 評価に当たって「実行状況」を活用せず「能力」だけで活動を代表させていることによる誤用が多い。
- 2) 一定の区別は行いが「能力」の項目を重視することによる誤用: 実施できるかどうかという「能力」に比べ、最も重要なのは、実際に実施しているかどうかという「実行状況」である。また、評価に当たっては、「実行状況」と「能力」との差も重要であるが、「能力」のみを重視するという誤用により、実際の実施の有無が把握できない場合がある。

4. 「個人因子」を軽視する誤り

同じ「背景因子」でありながら、概して「環境因子」に比べ「個人因子」の関与・影響を軽視する傾向がある。「環境因子」が「生活機能」に影響する場合には、必ず「個人因子」との間の相互作用を経て影響が及ぶものである。また、その他、非常に多くの相互作用に「個人因子」が大きく関与するのであることから、これを適切なバランスで評価しないことによってICFの「統合モデル」としての強みを十分に活かせていない場合がある。

5. ICFのコードを引用することがICFに準拠しているとする誤解

ICFの基礎概念となっている生活機能モデルに基づかず、ICFのコードを使用することのみをもってICFに準拠しているとされてしまう場合がある。また、ICFの生活機能モデル図を用い、その枠内にICFコードを列挙しているものの、内容的には機能障害中心の医学モデル的な分析に偏った評価となってしまうっており、これを「ICFに基づく」とするのは困難である場合もある。これらは、「統合モデル」としてのICFの本質的な面を活かしておらず、ICFの有用性を十分に活用できていないといえる。

6. その他

以上の他に、利用者は、それぞれに個人的な経験、認識、価値観等を有しているため、個々の理解に基づき「ICF」に対する解釈・断定を行ってしまうことによって、ICFの活用価値を過小評価し、十分に活用しきれていない状況も存在している。